

古代初期の図書館の成立と発達

——アッシリア・バビロニアを中心に——

吉 田 貞 夫

一、文字及び書写材料の発達

(1) 文字の発達

古石器時代（B.C 二万年～八千年）には、人類は岩窟に住んでいた。彼等は狩獵に出かける前に洞穴の壁に石片で動物の絵をほって、神に捧げたり、自らの勇気を鼓舞していた。旧石器時代（B.C 八千年～二千年）の頃には、木の葉や草で彩色さえほこした。

このような絵や図形は次第に簡略化され、意思伝達の手段に用いられる時代がやってきた。石器時代以後の自然の模倣としての Pictogram（絵文字）が Ideogram 又は Ideograph（表意文字）に発達したのは、紀元前三千年頃のことである。表意文字は人間の思想・行為・物体の性質を表現する記号である。この表意文字の代表的な文字として、スメル人の用いた Cuneiform（楔形文字）がある。

例えば、楔形文字の中には、次のようなものがある。

円形又は四角の中に「く」を三個書いて、「三十日」を表わした文字がある。この円や四角は太陽を象徴するもので

ある。

鳥の形をした文字は、「運命」を象徴しているが、これは空を飛ぶ鳥を見て運命を占ったからである。

以上の如く図書が出来る前提として、文字が絵文字から表意文字に進歩したのである。

そして、この次に来るべき過程として、人間の音声を表わす文字、即ち、Phonogram (表音文字) が誕生した。この表音文字はエジプト及び中国で発明された。ここでは先づエジプトの表音文字について述べる。

例えば、口の形をした \circ を記号 ϵ で、ツノのあるマムシ \times を記号 f で、フクロウを記号 m で表わし、夫々 $\epsilon \cdot f \cdot m$ なる記号に単音節を与えた。当時はまだ母音がなかったが、例えば $f \cdot m \cdot n$ で $fman$ の如く、母音が入った場合と同様に発音していた。 $fman$ とはエジプト語で英語の *famine* (飢饉) の意である。エジプトの文字は地中海沿岸の諸国に広まり、やがてギリシヤ人によって母音の記号がつけ加えられたのである。そしてその後、表音文字に音節構成がなされ、現代語の如き syllabary (音節文字) が出来上った。

又、エジプトの文字は、特に hieroglyph 又は hierogram (象形文字) と呼ばれる。

エジプトの象形文字は商業用語に用いられたが、この象形文字の草書体は heratic といわれ、ヒエラチックの簡略文字は demotic (民用文字) と呼ばれる。

中国で象形文字が発明されたのは、黄帝 (紀元前四千年) 以前の頃といわれる。当初は数少なかった文字が、漢時代には九千、唐時代には二万、清時代には四万をこえるようになった。これは字素を二組、三組と組合す方法によって意味や觀念を表現するようにした。中国に於いてもエジプトの場合と同様に、絵文字から意味や觀念を表現するようにした。中国に於いてもエジプトの場合と同様に絵文字から表意文字と、表音文字への発達過程をたどっている。

例えば、木といふ字素を三つ組合すと、木の繁っているところ、即ち「森」を意味し、日と月と組合すと「明るい」という合意文字^{カイト}が出来る。それでは中国に於ける表音文字はどうして出来たのであろうか。中という字は中国語で「チ

古代初期の図書館の成立と発達

「^{カイ}ン」^{カイン}と発音されるが。この合意文字たる仲、忠、忬、沖も同様に発音され、合音と音とが調和的に組合されているのである。

中国の漢字がエジプトやギリシヤの文字と異なった文字を生み出した理由は、本来書写材料が固い質の獣の骨や亀甲、青銅に刻印された為に、直線と折線の文字が発達したのである。

(2) 書写材料の変遷

先ず図書とは語源的には「河図洛」の略で、「冊子に綴った本」の意である。

ALA. Glossary of Library Terms ^{ワザ} 下記に如く定義している。

「木片、象牙片、紙、羊皮紙又は類似材料に筆写するか、印刷して、それを糸でかがったり、つづったりした収集物である。

通常、連続的に筆写又は印刷された紙を折畳み製本したもので、印刷の場合には、一定の大きさの一巻の図書形式をとり、パンフレットと区別している。簡単にいえば「仮綴じされ、製本されて一巻に集められた印刷物の謂である。

しかし、現代ではマイクロフィルム、テープレコーダー等も書物の一種とみなされる場合もある。

図書その他の知識と情報を伝達する媒体としての内容とは別に、例へば、図書そのものに対する研究が考へられるが、この研究対象は、狭義においては、書誌学 Bibliography とか書物学・図書学 Bibliology と言われる。これは図書そのものの技術、芸術、歴史の面からの研究に他ならない。

書写材料は、国家、民族、時代の変遷と共に変化した、大体中国では、竹から木、木から帛^{オク}、帛から紙に、又ヨーロッパでは、粘土からパピルス、パピルスから羊皮紙に、羊皮紙から紙に変遷した。

書写材料と文字の発達は不可分の関係にあって、例えば蠟板には鉄筆 stylus で曲線的な円味のある文字で記され、羊皮紙には明確な読み易い文字で書かれた。エジプトの hierogram (hieroglyph) 象形文字は、もともと石や貝に刻ま

れた固い文字であったが、その草書体の *hieratic writing* はパピルスと材料とした簡略文字であった。

(a) 石

洞窟の壁や石器時代の書写特に絵文字の書写材料であったことは、「文字の発達」のところで述べたので、ここでは省略する。

(b) 粘土 (Clay Tablets)

紀元前三千五百年頃には、メソポタミア地方に住んでいたスメル人は、粘土の上に、*stylus* と言う石の小斧か金属棒の如きもので、楔形文字 *Cuneiform* を書き、太陽で粘土をかわかしてから後、窯の中で焼いて保存を長くする工夫をした。この方法によれば、火熱や湿気や腐蝕には強いが、破損し易い欠陥を持っている。メソポタミアは言葉の示す如く「河と河の間にあるもの」、即ちチグリス河とユーフラテス河の流域にあって、河水が粘土を運搬したので、これが書写材料に利用されたのである。

スメル人は粘土板 *Clay Tablets* に本来印章で名前を押していたが、次第に書写材料に用いるようになり、この方法を現代の輪転機の原理と同様に、円鑄の原版を粘土板上にころがして文字を彫った。後、スメル人を滅ぼしたセム族の一派がバビロニア王国をつくったが、このバビロニア人は、粘土製の六角柱又は八角柱のシリンドラーの各面に原版を押して粘土板本を製造した。

(c) パピルス

エジプトでは紀元前三千年頃には四〇余りの集落国家が統合され一王国が形成された、この頃用いられた *hieroglyph* 象形文字やその草体の *hieratic writing* はパピルスという水草の繊維で作った書写材料の上に書かれた。しかし、パピルスが材料に利用された時期は正確にはわからないが、大体紀元前二千五百年頃と推定されている。パピルスに象形文字で書かれた謂所「死者の書」“Book of the Dead”は、墓の中に死体と共に収められた死後の国の案内書で、これ

古代初期の図書館の成立と発達

は、紀元前千八百年頃に書かれたものであろう。その後この宗教的慣習が盛んとなり、僧侶が写字の仕事にあたった。パピルスはナイル河畔に茂る高さ二米位の茎をもつ水草であるが、この草の皮をはいで縦横に重ね、水にひたした後、圧縮して乾燥したものである。これには煤と樹脂とをねり合した一種のインクを用いて文字を書いた。

これが謂所「パピルス本」である。ペンには芦の茎をけづって先端をとがらせ、現在のペンのような形にして用いた。長文のものには、パピルスをつないで両端に「巻取り棒」をつけた。従って当時は図書を数えるのに一巻、二巻と呼んだので *roll* とか *scroll* の意をもつ *volume* (巻) なる語が、今でも用いられているわけである。

エジプトのアレクサンドリアでは良質のパピルスが生産され、紀元前三百年頃には、ギリシヤやローマにも大量に輸出された。そして今でもこの「アレクサンドリア紙」なる名称が残っている。

パピルスの出現によって、エジプトの文献の数は著しく増大し、トレミ王朝 (Ptolemy) 時代の首都アレクサンドリアに設立されたアレクサンドリア図書館には、七〇万巻のパピルス本が蔵されていたと言う。

エジプト語の *papyrus* はギリシヤ語で *biblos* と言われ、本の意に用いられるようになった。尚、パピルス、つまり「紙」(*paper*) は独語で *papier*、仏語で *papier*、露語で *Иатка* なる語で現存している。

(d) 羊 皮 紙

パーチメント (羊皮紙) の語源はラテン語の *Pergamene* (紙) を意味する言葉から派生していて、元来小アジアのペルガモスで生産された書写材料である。

紀元前二百年頃小アジアの中心地であったペルガモスの王 *Eumenes* は学問の振興をはかり、アレクサンドリア図書館に劣らぬ図書館の設立を志したが、エジプトのトレミ王は対抗意識からパピルスの輸出を禁止してしまった。そこでエウメネス王は羊皮から書写材料を生産することに成功したのである。

羊皮紙は羊や山羊の皮の表面をけづって薄くし、滑らかな石で磨いてつくったもので、強く、又折たたみも自由とい

う長所があった。当時はパピルスの場合と同じく、巻取方式をとっていたが、五世紀頃になって巻き本から綴じ本に変わった。羊皮紙は値段の高くつく材料であったから、出来るだけ多くの文字を取めることのできるような工夫がこらされ、十二世紀には Gothic 「ゴシック体」が生れた。

当時写字師 Copyist は羊皮紙に定規で線を引き、声で作ったペンや鵝鳥の羽で作ったペンで、一文字づつ文字を書き、頭文字は花や鳥、動物の絵をつけて装飾文字を考案した、又これらの文字に色をぬることもあった。パーチメント本そのものの外形に美観を与えるため、金や銀、宝石をちりばめたりするようなことも後には流行した。

(e) 貝多羅葉本

古代印度では多羅樹の葉を乾燥し、その表面にスタイラスで文字を書いていた。葉にスタイラスで文字を刻むと黒汁が浮き出て、恰も墨で書いたと同じ結果になった、これを一定のサイズに切り表裏に板をつけて表紙にしたものである。

(f) 竹 木

中国では古代から、書写材料に竹や木の小片やその編み合わせたものが用いられた。竹製のものを「簡」といい、木製のものを「版」といったが、字数の少ないものには前者、多いものには後者を用いた、更に長編の文書や図書には、「簡」を皮であんで連結した、これを特に「冊」又は「策」といった。冊なる文字は冊という象形文字から出来たことは、その形からしても容易に理解出来る。かくして現在我々は図書を数えるのに一冊、二冊と呼ぶ所以がここにある。

(g) 紙

紙が書写材料として発明されたことと、印刷術の発明改良は人類文化史上の最大偉業の一つである。

紙は一説では、西歴一〇五年（千八百六〇年前）に中国の蔡倫によって発明されたと言われている。この紙は樹皮、麻くず、ぼろ布を臼の中ですって出来たパルプ状の原料を、竹のすだれと絹糸のすだれに通して作ったものである。

これより先、中国では奏の始皇帝の時代（記元前二二〇年）に、蒙恬が毛筆を発明し、その書写材料に絹の巻物を用

古代初期の図書館の成立と発達

い、特にこれを帛と呼んでいた、この帛から紙の時代に変遷したことは著しい進歩である。

中国で発明された紙は六一〇年頃に、日本に伝わった。高麗の曇徴が中国の製紙法を伝え、又学問の興隆に寄与するところ大であったので、曇徴は聖徳太子に尊重されていた。当時聖徳太子は、楮の樹を主原料とした強韌な和紙を製造することに成功している。

中国の紙がヨーロッパに伝播したのは一一五〇年頃のことであるが、一五世紀にはヨーロッパ全土に製紙法が普及し、一七世紀になってアメリカのフィラデルフィヤにも大製紙工場が出来た。かくして、かつて貴族や僧侶に限られていた学問も安価な材料の紙の普及と、ドイツ人 Gutenberg の活版印刷機の発明によって、学問文芸が一般大衆のものとなり、都市には学校図書館や大学図書館が陸続と建設されるに到った。

尚、スエーデンの Stein 博士以下の探検隊が敦煌の千仏洞から発掘した写本二万巻の書写材料たる紙は、ぼろ布を主原料としたもので、書かれている文字はペルシャ文字の一種であることが立証されている。このことは西方から入った文化が中国文化に同化されていたことを意味するのではなからうか。

奈良時代には唐文化が日本にも入り、美術、工芸、建築が発達し、そのため、製紙業が中央から地方に伝播した。称徳天皇の出版された「百万塔陀羅尼」は世界最古の紙に書かれた印刷物として名高い。また正倉院や法隆寺には「法華経」や「阿弥陀経」を写した麻紙の写本が現存している。

日本で洋紙工場が設立されたのは明治以降のことで、洋紙の消費が高まるにつれて、和紙の用途は減少した。

二、古代初期の図書館の成立と発達

紀元前何年頃に図書館（文庫）が創設されたかは定かではない。文字が考案される以前に、図書が出現したとは考えられないし、また図書が出現する以前に図書館が設立されうるのは考えがたい。

しかし推定では、セム人（アッシリア人、バビロニア、フェニキア人）の図書館は、アカド人の遺産であり、図書館員という言葉も、アカド語の遺物であると言われている。そしてメソポタミア地方の初期の図書館員は Amel-anu 即ち “man of the written tablets” と呼ばれるバビロニア人であった。

メソポタミアの古墳から発見されたものの中に、クーンジク Kouyunjik の図書館がある。この煉瓦製の図書館はチグリス河畔のクーンジクに建てられたもので、アッスルバニバル王 Assurbanipal（紀元前六六八～六二六）の宮殿から発見された。この発見は一八四五年イギリスの考古学者 Sir Austin H. Layard によってなされた。アッスルバニバル王の宮殿図書館（王室図書館）からは、数多くの粘土板本が発掘されたが、悉く砕けていた。しかし、アッシリア文明の研究家にとって、この粘土板本は表音文字と言語の研究の重要な素材となった。一八七〇年には、George Smith が大英博物館収蔵の粘土板本の配列と解説に成功したし、一八七六年には、デーリー・テレグラフ誌が古代文字解説の連載をはじめたので、広く一般の間にも、アッシリア文明に対する関心が高まった。

さて、アッスルバニバル王以前における歴代の王の図書収集熱はどうであつたろうか。Tiglath Pileser 二世は歴代の王の碑文を写させたし、Sargon 二世は占卜、碑文に関する図書を収集させた。また Sennacherib 王はアッシリヤ法典や歴史書、碑文の写しを写字生にとらしているし、Esarhaddon 王も歴史書、神話書の収集保管に努力したと伝えられる。しかしながら、アッスルバニバル王の収書熱とその功績に比すれば、以上の諸王は比較の対象とはならない。

アッスルバニバル王は、全国に使者を派遣して、各市の神殿図書館に所蔵してあつた神話、伝説、賛歌、祈禱文、法律、医学、天文、占卜、辞書、年代記等を翻訳させたり、副本を写したりさせた。この中にはスメル人以来の貴重な宗教文学も、有名な Hammurabi 法典（紀元前二千百年）も含まれていた。このようにアッスルバニバル王は自己の統治する帝国の文献のみならず、古代バビロニア文典の副本や翻訳書の作成収集に熱心であつた。又王は都市の侵略と占領

古代初期の図書館の成立と発達

にもなって、無数の文獻を首都ニネベに持ち帰り、自国民の利益に供した。

アッスルバニバル王の Nineveh の図書館には、約二万巻の蔵書が収められていた。所謂、粘土板本が発見された室は、本来の図書室ではなく、図書館は宮殿の建物の上層部にあったが、崩壊した時、下部に落下したものと推定されている。ニネベの図書館の文庫長 Nebo-zuqub-yukin は、サルゴン二世時代からセンナヘリブの時代まで約三〇余年その職にあったといわれる。

当時の記録物の形態は、前述の如く、Clay Tablets (粘土板本、粘土板文書、瓦片文書) で、通常、粘土板の両面に楔形文字で、陰刻され、各小片には、頁付けがなされ、通しの標題が刻まれていて、連続物の表示がなされている。又、粘土板本と同じ形の外枠の円筒にも短かい標題が刻まれたものもある。この外枠は現代の図書のカバー或はケースと同じ目的をもつものであることは言うまでもない。ニネベの図書館所蔵の粘土板文書の主題内容は、農業、灌漑、祈禱、神話、伝説、賛歌、天文、占卜、戦争、政治、歴史、法律、詩、医学、辞書、年代記などであるが、就中、医学文獻で興味のあることは、病氣の分類、治療、薬の処方についての記録も発見されていて、これには建材用としての石や材木に関する説明が添えられている。

動物の目録に見られる動物の分類体系は、リンネ協会 (Linnean Society、一七八八年イギリスに創設された動植物学会) の謂所リンネ分類法と殆んど同一であることは、当時の動植物学の進歩の程度を察知するための良き資料である。神の業績、祈禱文、賛歌、占卜等の文獻はカルデア文獻の重要な部分を占めているし、又一方、ヘブライ人の戦争賛歌に類似している。

アッスルバニバルの図書館は、図書館の種類という観点からしても、興味がある。勿論これは宮殿図書館とか王室文庫といわれるものであるが、一方、次の引用からして、公開図書館でもあったということが推測される。

「男神ネボ Nebo と女神タスミット Tasmit [知識の女神] から真の政府の基礎とは何かを見聞する眼と耳を与え

られた世界とアッシリアの王たるアツスルバニバルの宮殿。ネボとタスミットの二神は、我が先祖の諸王に、この楔形文字と叡智の神ネボの政見を啓示し給う。我が粘土板にそれを記し、署名し、配列して、臣下の教育のため我が宮殿に安置するものなり。」

これは廃墟から発掘された記録の一部である。

Layard の説明によれば、図書館（文庫室）のあった建物は、魚神 fish-gods の守護する廊下を通じて二つの小室に通じ、各室は相通じていて、記録室として用いられていたらしい。これらの二室にはアッシリア王の法令や公文書が、床から一フィートの高さに積重ねられていたようである。粘土板の大きさは、まちまちで、大型のもので長さ約九インチ六ラインチ、小型のもので一インチ程度である。しかも小型のものには、僅か一二行しか書かれておらず、楔形文字で書かれた小文字は拡大鏡で見なければ判読しかねるほど小さい。粘土板の中には、フェニキヤ文字や、草書体のアッシリア文字でぎざまれたものが残っている。

記録室から発掘され、現在大英博物館に保存されている文典の代表的作品を挙げておく。

I アッシリアーバビロニア語文法典

(1) アカド語辞典（意味づけはアッシリア語）

(2) アッシリア同意語辞典

(3) アッシリア語文法典

(4) 楔形文字辞典（初期の象形文字と比較対象）

II 名祖表（紀元前九一一〜六〇〇）

III アッシリアバビロニア対照歴史年表

IV 地理辞典

古代初期の図書館の成立と発達

古代初期の図書館の成立と発達

V 固有名詞表

VI 統計記録集

VII 「私権」に関する論文

Sippara の図書館が発掘されて以来、宗教上の勢力が強かった寺院では、王室文庫の成立よりも古くから粘土本が収集保管されていたことが明かにされた。換言すれば、寺院文庫は帝王の宮殿文庫よりも、遙かに古い歴史を有することになる。Sippara の寺院文庫には幾千の粘土板本が分類され、昔のままの姿で、書架上に見えられている。興味のあることは、寺院文庫の保存資料から推測すると、寺院文庫のあるものは、現在の学校図書館に相当する文庫があったということである。このことは、バビロニア時代に、読書指導と文字教育に関する資料が蔵書中に多数含まれていたことから、推定される。しかも学校の建物は寺院に面した処にあり、また、学舎から発見された資料の中にはハンムラビ王（紀元前二一〇〇年）の黄金時代の賛歌、音節文字表等が含まれている。この時代には、図書館職は *Amurra-secretaries* と呼ばれる専門字師が、寺院文庫の管理職を兼ねていた。

古代図書館の中で、最も有名なものの一つに、Agadé の Sargon 王が創設した図書館がある。この図書館の司書であった Ibnišarru の名は現在に伝わり、又司書職としての彼の美しい印鑑が、ルーブル美術館に残っている。七二巻からなる *Namar-Bili* という天文学辞典も、Agadé の図書館用に編纂されたものである。この図書館の文献目録は、現在の図書目録と同じく、読者のために特定の指示がほどこされている専門的な目録である。当時の図書、即ち粘土板本を借り出す場合にも、著者名、書名、分類番号及びその他の記載事項を、パピルスの小片に記入する習慣があった。又、粘土板本には、分類番号と書架上の位置が示されていた。この事実から見ても、サルゴン王時代から貸出方式や分類法

が考案されていたこと、それ以前から、経験によって、その基礎づけがなされていたことがわかる。

Erech にはサルゴン二世の有名な図書館がある。サルゴン二世の時代には、アカード語文典をアッシリア語に翻譯することが盛んで、古語文法書や辞典類の編纂においても、業績を残している。古代の聖典、年代記、叙事詩、占卜等の文典はアカード語で書かれていたので、古文書の研究と翻譯は、図書館の重要な業務の一つであった。

Erech の図書館から発掘された「大洪水」の物語は、クレーンジクやニネベの図書館に収蔵されていたこの物語の原本であろうと推定されている。バビロニアのノアの「大洪水」の物語は、大英博物館所蔵のアッシリア粘土板本に類似しており、また、聖書の「大洪水」にも類似している。この図書館からは百個以上の魔術に関する粘土板本も現れたが、その中、アッスルバニバル王の写字師の署名入りのものが現在している。

アッシリアのニネベの図書館が発見されてから後、同じチグリス、ユーフラテス河川の Nippur から、粘土板本が多数発見された。この発見はペンシルバニア大学の探検隊によってなされたもので、ニップルの図書館からは、政府の公文書、数学、年代記、度量衡に関する資料が発見された。ニップル図書館の文庫室は長さ約十メートル、巾五メートルあり、内壁には木製の書架が固定され、その上に粘土板本が配架されていたと考えられる。

ニップルの学校図書館からは、掛算表、音節文字表、文字練習読本、文学作品等があらわれている。寺院や学校に附設されていた図書館は多く、これらは現代の僧院図書館や学校図書館、大学図書館に類似している。しかしながら、前述の如く、アッスルバニバルも言うように、「これらの図書館は公開図書館であったと考へてよからう。Sayce 教授がその著 “The higher criticism and the the monuments” の中で、「国内到る処に図書館があり、それらは数千の図書を蔵していた。」と述べている如く、古代バビロニアの図書館が、如何に発達していたかが窺えるのである。

古代初期の図書館の成立と発達

結 語

図書及び記録物の歴史は、学問の歴史の一面と見なされてよからう。学問の伝統は、記録物が保存される図書館を媒介として伝承されてきたし、学問の盛衰は、これ即ち、図書館の盛衰を物語るものであった。

文字の始めは口承伝授から始まり、その伝承のために書写記録が生れ、しかも書写記録物を保存する場所たる図書館が必然的に発生したのである。文獻の歴史において、文獻の著しい流出にともなって、活潑な図書館活動が行なわれた。紀元前五世紀のアテネの図書館は、紀元前四世紀末には、アリストテレスの図書館に承継がれ、更に紀元前三世紀には、アレクサンドリアの大図書館に伝えられたのである。アレクサンドリア図書館の第一次的使命は古典時代の文獻の書誌的排列にあった。紀元前二世紀におけるギリシヤ文典の侵入と、急増するラテン文典を収蔵するために、ローマでは、私有図書館（別荘図書館 *Villa Library*）や、都市国家の国立図書館が陸続と建造された。

同様にして、イギリスではエリザベス朝以降、圖書の私有保存が流行し、一方王政復古期（一六六〇～一六八八）には、文学、歴史、科学等の分野の研究が盛んになった。

学問及び文芸活動と、書写材料の間には、密切な関係があり、紀元前六世紀には、多量のパピルスがエジプトからアテネに輸送されることによって、アテネに文獻の洪水が押し寄せる結果となった。かかる現象は、五世紀後には、ローマにも起っている。即ち、パーチメントの供給が増大したために、西歴四世紀まで、パーチメントを材料とする宗教関係の圖書が多数出現している。更に、一五世紀には、紙という書写材料の紹介と、グーテンベルグの活版印刷機の発明によって、エリザベス朝の隆盛発展をみるにいたった。

図書館の歴史は、アッシリアと中国に始まる。アッシリヤの粘土板本は寺院や宮殿と関係が深い。古代初期の図書館が寺院や宮殿と結びついている事は、興味深いことである。文字のない時代には、人間の知識は、それ自体神秘的な力を

持ち、しかも圖書は、矢や槍や鉄砲よりも強力なものであるという強い感情と信仰があったと考えられる。“The pen is mightier than the sword.”といふ諺は、「偉大なる図書館は、大軍よりも強力な武器なり。」と置き換えることが出来るかも知れない。このことは、事実、図書館の発生成立以来実証されてきたことである。例えば、文化の破壊者ゴート族もアテネを略奪した時ですら、「すぐれた学者は、非力な軍人をつくった。」——「すぐれた学者が軍人を弱化した。」——といつて、図書館には、放火しなかったといわれる。このことは、ゴート族が、ギリシャの学問に畏敬の念をいだき、神秘、神聖なるものには敢えて触れなかったがためであろう。モンテニユは、このエピソードを評して、「知識の追求は、人間の勇気を弱めるものである。」と述べている。ギリシャ人の世界にも、ローマ人の世界にも共通した図書館と宗教の結びつきは、中世においては、教会に継承され、近世に及んでいるのである。

主要参考文献

- | | | | |
|-----------------|--------------------------------|-----------------------|--------|
| 和田万吉著 | 図 書 館 史 | 芸 草 会 | 昭和十一年 |
| 江守賢治著 | 本の小辞典 | 明治図書 | 昭和三十年 |
| 大塚幸男著 | 書物の歴史 | 白水社 | 昭和二十九年 |
| 高津春繁著 | 古代の書物 | 岩波新書 | 昭和二十八年 |
| オズワルド著 | 西洋印刷文化史 | 弘文荘 | 昭和九年 |
| 玉城繁訳 | 粘土に書かれた歴史 | 岩波書店 | 昭和三十三年 |
| 板倉勝正訳 | History of the Book | Scarecrow | 1958 |
| Dahl, Svend | A History of Libraries | Scarecrow | 1955 |
| Hessel, Alfred | Encyclopaedia of Librarianship | Bowes & Bowes | 1961 |
| ALA | Le Livre | Les Editions Du Chêne | 1949 |
| Lejard, André | The World's Earliest Libraries | Grafton | 1931 |
| Bushnell, G. H. | | | |